様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２２３１

研究課題名（和文）二条家周辺による歌書収集書写活動の検証と分析―擬定家本私家集を中心に

研究課題名（英文）Focusing on inspection of the collection copying activity that I come near around Nijo family and an analysis-"Gi-Teika-bon" of the poem.

研究代表者
小林　一彦（KOBAYASHI, Kazuhiko）

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号：３０２６９５６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：「擬定家本私家集」とは中世私家集群として特定の個体（群）をあらわす固有名詞ではなく、実は普通名詞であったことを論証した。時雨亭文庫より「為藤卿筆」と表紙に書かれた本を含む進出の私家集「左京兆集」など写本三本が出現してきたが、冒頭部分を定家様で書写するなど「擬定家本私家集」そっくりの形式で写された、写本群の名残であることが判明した。すでに報告されていた大本サイズの擬定家本「郁芳門院安芸集」も、集付が資経本と同様であり、当時、該本は資経本とひとまとめにされていたとの新見を提示した。藤原定家信奉の姿勢はすでに私家集書写という形で鎌倉時代後半には一般化していた可能性があったことを指摘した。

研究成果の概要（英文）：I demonstrated that "Gi-Teika-bon" wasn't the proper noun which shows a specific individual (group) as a medieval collection of its poem group and was an appellative actually. Three manuscripts had emerged from a late autumn shower bower library "Ito Lord brush" and a collection of their poem of an advance including the book written on a cover "the Sakyo one trillion collection", but such as copying the beginning part by Sadaie, it was revealed that a "this gi Sadaie collections of the poem are remains of the manuscript group which was copied by the similar form. When it was also like a shi sutra book with a collection a gi Sadaie book with the foundation size reported already "the Ikuyoshi Empress Dowager Age collection", gaihon showed a shi sutra book and lumped Arami. The posture of the Fujiwarano Sadaie espousal was the shape as the collection of one's poem copying already, and I pointed out that there was a possibility that I generalized in the second half in Kamakura era.

研究分野：日本文学

キーワード：中世私家集　擬定家本私家集　資経本私家集　承空本（西山本）私家集　定家仮託書　冷泉家時雨亭文庫　二条家

１．研究開始当初の背景

冷泉家時雨亭文庫が貴重な文献資料の宝庫であることは、これまでも度々指摘されてきたが、研究代表者は 2012 年「The Power of Poetic House　Particularly Relation to the Reizei「歌の家」の力―冷泉家を中心に―」（日英バイリンガル版『Waka Opening Up to the World　世界へひらく和歌』所収）をまとめ、国外に向け、日本の貴重な和歌資料を襲蔵し保持してきた「歌の家」冷泉家の価値を紹介した。

その冷泉家時雨亭文庫所蔵の私家集の中で、ひときわ注目されるのは、冒頭一、二丁を定家風な書体（定家様）で書写した一連の私家集群、いわゆる「擬定家本私家集」である。この擬定家本にいちはやく着目し、京都産業大学日本文化研究所共同研究プロジェクト「日本における偽書・仮託書の文化史的意義に関する研究」（2004～6、研究代表：小林一彦）の研究会において、研究代表者は「真と偽と擬―冷泉家時雨亭文庫蔵「擬定家本私家集」の出現」（2005/1/18）と題し口頭発表を行っていた。さらに翌年には当該分野の第一人者である藤本孝一氏、名児耶明氏を招聘し、日本文化研究所主催の学術公開シンポジウム「定家様と擬定家―擬定家本私家集の出現をめぐって―」（2006/7/15）を開催している。

冷泉家時雨亭叢書シリーズのうち、研究代表者は中世の私家集を井上宗雄・久保田淳氏らと調査し、解題執筆を担当していたが、その中に擬定家本の「亀山院御集」が存在したことから、この時の調査の経験をもとに、書誌学的な見地から和歌文学会関西例会「冷泉家特集」（龍谷大学 2010/4/22）において「擬定家本私家集と法印定為」と題し、擬定家本が生成される過程について私見を述べていた。しかしながら披見・調査した擬定家本は「亀山院御集」一冊にとどまり、体系的な論を成すには至らない恨みが残ったことは否めなかった。一方で、「擬定家本私家集」は「資経本私家集」を親本としていることが明らかになり、テキストそのものは本文研究上、価値が著しく後退した。そのため、冷泉家時雨亭叢書の主たる影印対象からは外され、資経本が現存しない九点のみが、一巻（叢書第 73 巻）にまとめられ影印に付されたに過ぎなかった。その後、藤本孝一氏により、冷泉家の蔵書には、対立した二条家の蔵書が多く流入していることが報告された。ますます、日本の中世和歌史を解明する上で、擬定家本が書誌学的に分析、検討されるべき対象として重要になってきた。

研究代表者はすでに平成 23 年度科学研究費補助金基盤研究(C)「私家集の書誌学・文献学による解析を通じて基底部から新しい和歌史を築築する」を得て私家集の研究を試みていた。一定の成果をあげることはできたものの、擬定家本の全容が明らかにならない状態では、どうしても隔靴掻痒の感を否めなかった。

ところが、2015 年の秋、朝日新聞社により叢書の続編刊行が決定し、研究代表者もその編集員として出版計画に参画することになったのである。擬定家本私家集の全冊影印が決められ、応募時には数点の私家集の調査を終え原稿化、さらに点検が行われている時期であった。幸いにも原本を調査し得た叢書編集委員の一人として、書誌学的な知見をベースに、研究を深化させ、典籍による中世和歌の動向を、少しでも明らかにすることができればと考えるに至った。擬定家本のすべてが影印に付され、私家集群の全貌が明らかになる前夜が、当該研究を実施する時期に重なっていたのは幸いであった。

２．研究の目的

当該研究の目的は、冷泉家時雨亭文庫の中世私家集群の中でも、とりわけユニークな擬定家本私家集の全体像を、さまざまな角度から分析し、また検証することにある。

具体的には、以下の 3 項目を掲げて研究に取り組んだ。

（１）研究代表者の、これまでの研究成果や仮説を自ら検証することで、擬定家本私家集がどのように生成されてきたのか。歌道師範家としての二条家、および冷泉家の蔵書の有り様に見通しをつける。

（２）定家仮名遣いの発生、およびその受容は、日本の歴史的仮名遣いを考察する上でも、きわめて重要である。その最初のまとまった事例である擬定家本を窓に、定家を研究する「定家学」が鎌倉時代に発生していたことを突き止めることで、国語学の分野にも新たな視点を提供する。

（３）藤原定家は日本文学史の中で歌聖と仰がれ、また青表紙本源氏物語などの古典書でも知られるが、擬定家本を窓に、書写者としての定家、また仰望される存在としての定家を後代から逆照射することにより、新たな定家像を探る。

以上の 3 項目である。

３．研究の方法

擬定家本私家集のような特殊な私家集が、鎌倉末期に生成されてくる背景について、和歌史上の問題点から考察を加える。

冷泉家時雨亭文庫蔵本については、研究代表者が原本を精査した上で作成した書誌カードと調査時の写真への書き込みにもとづき、その転写本や末流に位置する写本類との比較・校勘を行う。転写本については、書誌データを情報として援用するため、USB マイクロスコープ（顕微鏡）の活用や、デジタルカメラによる関係資料・文書記録類を撮影し画像として取り込むなどし、料紙や墨乗りの具合などを拡大・分析、筆跡などの比較・解析も試みる。

中世の歌壇史の動向と変遷に目配りを怠

ることなく、また同時代に書写された歌書類の本文や奥書情報などを駆使して、この時代の私家集の書写、生成のありようを具体的に把捉するように努める。

なお、近年は情報科学技術の発達により、資料のデジタル化が著しく進展し、web 上での公開・発信が人間文化研究機構国文学研究資料館や宮内庁書陵部・国立公文書館内閣文庫をはじめ、各研究機関・博物館・図書館・大学などによって推進されている。精巧なデジタル画像がネットで公開されるようになったことは朗報で、テキストの比較・校勘が極めて容易になった。けれども、やはり原本にあたらなければわからない事項も、依然として少なくないと考える。当該研究では、古典籍の調査を精力的に行った。

研究対象は古典籍・古写本であり、特に藤原定家に筆者を仮託したような擬定家本であるが、生身の定家についても、考える機会を意識して多く持つように心がけた。

４．研究成果

（１）研究初年度に学会発表「普通名詞としての「擬定家本」と中世歌壇史―再び二つの袖中抄のことなど―」（和歌文学会関西例会、2015 年 4 月、大手前大学）を行った。「郁芳門院安芸集」は、一連の擬定家本私家集と同じように冒頭部を定家様で書かれてはいるものの、形状は大本であり、叢書では『擬定家本私家集』の巻に収載されたが、実情は別の個体が紛れ込んでいた（実際には同じ巻にまとめて収載されたのだが）ことを実証した。集付が資経本と一致するため、当時は資経本とひとまとめにされていたのではと新見を提示した。さらに新たに１００巻をめざして刊行が再開された冷泉家時雨亭叢書の中に、「為藤卿筆」と表紙に書かれた本を含む、同じ体裁の私家集が新たに三本出現してきた。冒頭部分を定家様で書写した「擬定家本私家集」そっくりの形式で写された、新出の写本群の名残であった。すでに報告されていた大本サイズの「郁芳門院安芸集」も、実は同様な私家集群の一冊であり、＜擬定家本＞とは普通名詞であったことを確認した。定家信奉の姿勢はすでに私家集書写という形で鎌倉時代後半には一般化していた可能性があったことを指摘した。

（２）この発表をもとに、冷泉家時雨亭文庫の機関誌「しくれてい」に要点をまとめてわかりやすく述べた。「しくれてい」には、これまでも御文庫の古典籍の中から、女流歌人の私家集を取り上げ紹介しつつ、歌人の評伝や逸話なども交えて写本について論じてきたが、当該研究期間の３年間では、このうち擬定家本私家集が残る藤三位、檜垣媼、郁芳門院安芸の三家集を取り上げた。「郁芳門院安芸集」については、集付けなどを見れば、資経本に近いことを改めて論じた（「王朝の女流歌人―御文庫の典籍から―（十五）郁芳門院安芸」、2016 年 10 月、しくれてい、138 号）

（３）2016 年 12 月には、和歌文学会でシンポジウム特集「擬定家本の再検討」が組まれ、指名されて報告を行った。「プソイド定家の始発―「汝月明らかなり」と鵜鷺系歌学書への道―」と題する発表であり、後半のパネルディスカッションにも登壇した。擬定家本が製作された要因は、二条家側には蓄えられた古典籍が悔い返されて伝わらなかった、という従来の考え方よりも、むしろ藤原定家の嫡男為家と嫡孫為氏（二条家祖）の父子の間で、家本のテキストについての認識が異なっていたことが擬定家本発生の始発であったと説いた。為氏は家本絶対主義を取らず相対化し、歌学者として一目置く真観らの系統の伝本も尊重したのではないかと付言した。

（４）メディアを通じて、ひろく国民に研究成果を還元することにも意を注いだ。

① 新聞。刊行から 25 年、準備期間も入れると約 30 年の歳月を要し、世紀をまたぐ大出版事業であった冷泉家時雨亭叢書が遂に完結した。1999 年から解題執筆担当者として参画し、2013 年からは編集委員の一人として関与した体験をもとに、時雨亭文庫の文化的な価値と叢書完結の意義について一般向けに説いた。藤原定家の偉大さを示す当時の例証として擬定家本私家集群について詳述した。なお、朝日新聞朝刊紙面にシンポジウムの詳細が掲載された。

② テレビ。「京都国宝浪漫」は、京都の国宝を、その歴史や文化の背景をふまえて紹介するテレビの教養番組である。その第 58 回、京都御所の北側に今出川通をはさんで現存する唯一の公家屋敷、冷泉家。その敷地内には文書の正倉院と呼ばれる御文庫（文書蔵）があるが、そこには藤原俊成・定家父子の自筆本や手沢本、監督書写本など、国宝・重要文化財材が数多く収蔵されている。その意義と、文化史的な価値について、影印された叢書などを示しながら解説した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

① 小林一彦、「王朝の女流歌人―御文庫の典籍から―（十九）実材母」、2018、しくれてい、143 号、PP.4-5、査読無

② 小林一彦、「王朝の女流歌人―御文庫の典籍から―（十八）中務」、2017、しくれてい、141 号、PP.4-5、査読

③ 小林一彦、「王朝の女流歌人―御文庫の典籍から―（十七）伊勢」、2017、しくれてい、140 号、PP.4-5、査読無

④ 小林一彦、賀茂季鷹手沢本『新和歌集』

翻刻、『京都産業大学日本文化研究所紀要』第 19 号、2017、PP.62-111、査読無
https://ksu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2508&item_no=1&page_id=13&block_id=21

⑤ 小林一彦、「王朝の女流歌人―御文庫の典籍から―（十六）檜垣媼」、2017、しくれてい、139 号、PP.4-5、査読無

⑥ 小林一彦、「王朝の女流歌人―御文庫の典籍から―（十五）郁芳門院安芸」、2016、しくれてい、138 号、PP.4-5、査読無

⑦ 小林一彦、「王朝の女流歌人―御文庫の典籍から―（十四）経信母」、2016、しくれてい、137 号、PP.4-5、査読無

⑧ 小林一彦、「王朝の女流歌人―御文庫の典籍から―（十三）藤三位」、2016、しくれてい、136 号、PP.4-5、査読無

〔学会発表〕（計２件）

① 小林一彦、特集「擬定家本の再検討」シンポジウム報告「プソイド定家の始発―「汝月明らかなり」と鵜鷺系歌学書への道―」、2016、和歌文学会第 122 回関西例会、京都女子大学

② 小林一彦、「普通名詞としての「擬定家本」と中世歌壇史―再び二つの袖中抄のことなど―」、2015、和歌文学会第 117 回関西例会、大手前大学

〔図書〕（計１件）

① 赤瀬信吾、鈴木徳男、小林一彦、安井重雄、冷泉家時雨亭叢書 96『中世歌学集 続千首和歌』、2016、全頁数 748、PP.387-678、解題 PP.48-65、朝日新聞社

〔その他〕

① 小林一彦、シンポジウム報告、パネルディスカッション・パネリスト「冷泉家時雨亭叢書全 100 巻完結記念シンポジウム『和歌の家』が守り伝えるもの―冷泉家時雨亭文庫　未来へ」、2018、冷泉家時雨亭文庫・朝日新聞社、中之島会館

② 小林一彦、シンポジウム報告、パネルディスカッション・パネリスト「京都から始まる日本文化の創生－文化庁の京都移転の先に－」、2016、京都創生推進フォーラム、ロームシアター京都サウスホール

③ 小林一彦、テレビ解説、京都・国宝浪漫第 58 回「最古の公家屋敷～和歌の家・冷泉家の雅とは」、2016、ＫＢＳ京都・Ｂ Ｓイレブン

④ 小林一彦、シンポジウム・ディスカッサント「総合書物学への挑戦」、大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」第 1 回日本語の歴史的典籍国際研究集会(Project to Build an International Collaborative Research Network for Pre-modern Japanese Texts、 The 1st International Conference on Pre-modern Japanese Texts)「可能性としての日本古典籍」パネル２、2015、人間文化研究機構国文学研究資料館

６．研究組織

(1)研究代表者

小林　一彦（KOBAYASHI, Kazuhiko）
京都産業大学・文学部・教授
研究者番号：３０２６９５６８